

～大阪歴史散歩～

大正区の史話

赤羽三郎著

大阪の歴史第53号

抜刷

平成11年6月30日 発行

編集 大阪市歴史編纂所
発行 大阪市史料調査会

大正区の史話

赤羽 三郎

大正区の地図を拡げますと、やたらに泉尾と云う字に出会します。府立泉尾高校五十周年記念誌には、泉尾新田の開発、新田開発の願及び許可について次のように書かれています（『五十周年記念誌』府立泉尾高校所載『以津美』十周年記念号）。

天和三年（一六八三）若年寄稲葉正休の一行、畿内諸川の流域を踏査したとき、是等諸新田の川幅を狭め水勢を沮むのを知って、その撤廃を厳命した。

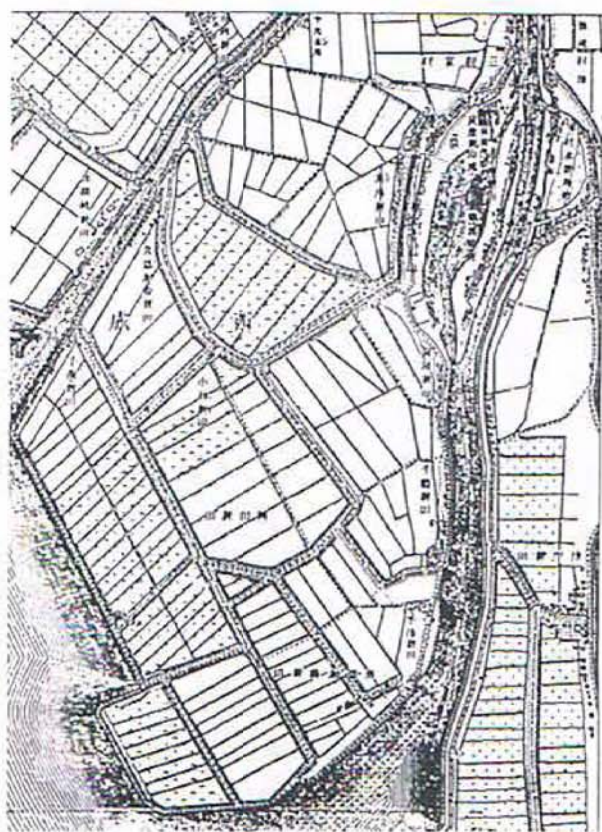
ところが元禄十一年（一六九八）八月淀川残余工事を継続してゐた。河村義通・中山時春・永井直又三名は令して沿海諸島の開拓希望者を募つたが、富豪の之に応ずる者、頗る多かつた。

泉州大鳥郡踞尾村、北村六右衛門なる富豪は直ちに元禄十一年（一六九八）八月十五日、次の通りの願書を奉

行に奉つて、新田の開発を願つてゐる。

この新田、泉尾新田は元禄十五年（一七〇二）に完成して現在に至つています。広大な泉尾新田は四七に分割され、いの割、ろの割と云う様に巾五米の井路で区割され、井路を利用して農作物や肥やしを運搬し、掘つた土で堤防を築きました。それは外海から押し寄せる高潮を防ぐためです。この堤防は泉尾新田では底面二四メートル、高さ九メートルにも及んでいます（明治三十年の地図参照の事）。

地主の北村家は小作人を集めて、新田に移住させ、農耕の仕事に従事させました。ここにも身分制がしかれ、村役人と



明治30年の新田地域（国土地理院発行「天保山」）

して当時庄屋・年寄・百姓代という三役がありましたが、新田の庄屋事務は支配人が取り扱ったそうです。

いうまでもなく新田の名前の泉尾は、和泉国の「泉」、踞尾の「尾」をとったものです。現在JR阪和線の津久野は現的に表現したものでしょう。

北村銀行の史実

土地神話の夢がさめた現在人はその対策に苦勞しています。今を去る一〇〇年前、同じ事が起こっていました。その時の解決策に大阪財界人の知恵がありました。土地を証券化する事です。

泉尾土地株式会社社長の話では、明治二十三年に泉州大鳥郡踞尾村出身の北村六右衛門の経営する北村銀行が破綻したため、一七〇二年に完成した泉尾新田を売却する事にしました。しかし広大な土地を一度に売却することはむつかしく、そこで一括して証券化し、買取り会社を作って債権者に引き取ってもらいました。具体的に述べると次のようになります。設立当時、明治三十六年当時の株価は額面の二割程度でありましたが、大正四年（一九一五）に大正橋ができ、市電が永楽橋筋まで開通すると、土地の坪単価は明治時代には一〇円までであったものが、大正二年二五円、大正七年五〇円、さ

らに大正十一年には百円以上にもなりました。この事で証券が値上がりしたので、証券を売却する事により土地売却なしに解決の方向に向かったということです。

交通手段の発達とは地価の問題というより、地域社会の発展に密接に関係があるようです。現在、泉尾土地株式会社は大正区千島交差点西側で営業されています。

近代紡績工業跡地（大阪紡績）

明治十年代、第一銀行の頭取であった渋沢栄一は綿業の輸入が巨額なのを知り、紡績業が急を要するのを知りました。そこで東京の綿業商人、大阪の財界人二人らに協力をもとめ、官営でなく民間での紡績業を起こすこととし、資本金二五万円で大坂紡績株式会社を設立しました。

技術面には山辺丈夫が適任ということで、起用されました。山辺は全国各地の紡績所を見学しました。これは立地条件が適合するか否かを判定するためでした。動力に水力をもちいるか、火力を使用するかも大問題でした。火力の方が有利であることが次第にわかってきました。最終的に、労働力の確保、原料・製品の運搬が便利な大阪西成郡三軒家村に工場建設を決定しました。明治十五年四月のことです。

大阪紡績はイギリスと我国の官営紡績所と双方に負けては

ならないと深夜も稼動することになりました。そのために必要なものは電灯です。外国から発電機を購入し、電燈をつけたのです。当時石油ランプの時代でしたから、電灯は珍しいのか、見物人が非常に多く三日間で五万人が訪れたという事です。当時は「ひもランプ」とも言っていたようです。

このように民間模範会社の出現により、付近には豊田織機工場（現在跡地には金光教泉尾教会）他関係協力会社が多数集まりました。

その後、大正三年に大阪紡績は三重紡績と合併し、東洋紡績になり、現在に至っています。なお、「東洋のマンチエスター」と云われる由来は、日清戦争のころに、綿布に関して、我国は世界最大の輸出に成長し、その上全国総産数の約四割を大阪で占めていたからです。

木津川飛行場の発展と衰退

大阪市内に大正末期から水上飛行機が飛び、气象台の支台がありました。このことを知る人は少ない。歴史を辿ろう。

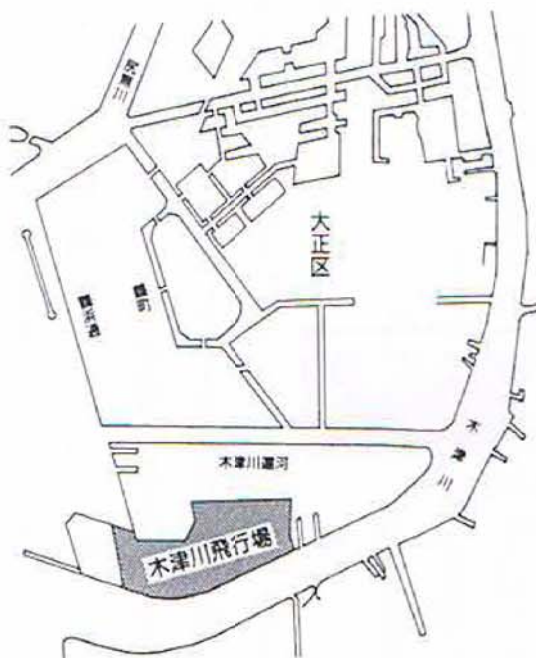
日本航空株式会社が資本金二〇〇〇万円で川西式飛行機の宣伝をかねて設立されたのは一九二二（大正十二）年でした。その場所は大阪市港区（大正区）船町で、木津川尻の埋立地を利用した水上飛行場でした。同年七月木津川飛行場は開場

式を行いました。

木津川飛行場は陸軍省（外局）の航空局の管轄のもと大阪飛行場（陸上飛行場）に発展して行くのでした。

規模は一〇万坪で南北幅四〇〇米、延長七二〇米で、初めは整地しただけのもので、舗装されたのは二年後でした。

昭和四年（一九二九）、大阪飛行場は正式に公共飛行場（通信省）に指定されました。東京はもとより九州・四国方面の定期便の発着機数、旅客数で日本最大の空港になりました。さらに大阪から、上海・大連方面へは水上機、大阪から朝鮮經由大連行きは陸上機などが発着し、大陸へ航空路線は延びて行きました。



木津川飛行場位置図
（『大阪築港100年』上より）



昭和初期の木津川飛行場(大阪都市協会 写真提供)

ています。

飛行場への交通の便は、大正七年十月二十六日に全通した市電松島南恩加島町線の大正橋停車場から、木津川運河行に乗り、終点で運河口の渡しを渡って徒歩一〇分一五分でやっと飛行場にたどり着きます。車でも渡しの世話になりました。昭和十一年(一九三六)十一月五日、可動橋の大船橋ができてやっと陸続きになったのです。このように立地条件が悪い

初期には大阪国際空港と呼ばれて、水上・陸上とも利用でき、大阪市内に近いため、期待は大きかったです。しかし場所が小さい上、工場の煙突、煙霧によって年間数回の事故がおこりました。具体的には、昭和九年に夜間飛行中、この大阪飛行場近くの煙突に飛行機が衝突する事故が発生し

ため、伊丹飛行場が開業してから、衰退の一途を辿りました。

大船橋

大船橋は、大阪で一番大きな跳ね上がる橋といわれています。明治三十年代から木津川尻は埋め立てられ、その後の木津川運河の開通によって、船町は南恩加島と分離されたま



昭和11年に竣工した大船橋可動橋(『大阪築港100年』上より)

までした。可動橋の大船橋が昭和十一年に架設されたので陸続きになりました。

この運河が一日、二千数百隻の船が石炭や原材料を積み運行しておりましたので、固定橋を架ければ運河の利用価値が半減します。このような理由で可動橋に計画され、また、それまで渡しの利用者も可動橋を使うことになりました。

戦後は可動しないので

のまま固定橋として使用されていましたが、昭和五十三年（一九七八）、新しい普通橋に生まれかわりました。

大正区の渡し舟

大阪市内で渡し舟を見ようと思えば、二〇分ほど歩けばどこかの渡船場へ辿り着く、それが大正区です。切符も現金もありません。無料で乗せてくれます。動く歩道でなくて、動く道路ということです。現在、港・此花の天保山の渡しと、安治川隧道を除くと、大正区に渡しが集まっています。大正区には七カ所もあります。

毎日常朝六時半から夜九時まで、一五分毎（千歳の渡しは二〇分毎、木津川の渡しはラッシュアワーを除いて四五分毎）に出航しています。一番乗りごたえのある渡しは千歳の渡しです。川でなくて内港を渡るため、距離が長い。大きな船が前を横切ると波が高くなってスリル満点です。五、六分の船旅ですので、船内は椅子もクッションもありません。でも天井には救命板がありました。その昔、紅葉橋近くの茶店でしじみ汁を飲んでる間に、渡しに乗り遅れ一夜を明かしたという、その伝説の所が基平渡しです。

昭和山

市内で一番高い山は鶴見新山、その次に高いのが標高三三

メートルの昭和山です。海拔一メートルの所から登るので五分もあれば頂上に着きます（ちなみに天保山の標高は四・五メートルです）。別名、港の見える丘と云います。ここは広域避難場所に指定されて、私達は非常に安心して暮らすことができます。昭和山を作るプランに協力した、今は故人である市議員の話では、大正区に山を作ってどうするのかと非難されたそうです。関一市長が昭和の初めに御堂筋を立案したら、市長は大阪のど真ん中に飛行場を作るのか、と言われた話に似ています。

昭和山に登ると目前に見えるのは、港大橋と新しく埋め立てられた人工島のビルです。以前昭和山ができた頃には六甲の山なみ、明石海峡が見えたのですが、今は港大橋があるために見えません。岩屋側の鉄柱一本が港大橋の右側の橋脚の下にかろうじて見えます。観光資源である大阪湾の夕日を大切にしたいものです。

かつて江戸時代、木津川河口にあった千本松は美保の松原か、天の橋立かと云われたようですが、明治初期に処分されてしまいました。今は、南港の一部に含まれています。

（あかばね さぶろう 北恩加島連合町会副会長）